
緑の精霊

菅野 リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑の精霊

【Nコード】

N1099A

【作者名】

菅野 リオ

【あらすじ】

夏休み、母親の実家に遊びに行ったヒカルは蔵の中でギーンと出会います。それはかつて悪霊として先祖に封じられていた精霊でした。ヒカルはギーンの過去を知り何とか元の姿に戻せないかと思いはじめます。そんな中ギーンは元に戻る方法を知ります。危険を感じたギーンはヒカルに黙って旅立つがすぐに気づき後追うヒカル。そこでギーンを陥れた九苦魔と戦いヒカルは人を思う気持ちを知るのでした。

第一章 出会い

緑の森の奥深く小川のせせらぎが聞こえます。ギーンは苔の精霊です。

僕が初めてギーンに会ったのは、お母さんの実家であるおばあちゃん家の蔵の中だった。

僕のお母さんは五年前に病気で亡くなった。今はお父さんと二人で暮している。

お母さんが生きていた頃は、毎年夏休みに二人で遊びに行っていた。

お父さんは仕事でいつも一緒には来なかった。お母さんが亡くなってからは僕一人で行くようになっていた。

今年も僕一人でおばあちゃん家に行く事にした。

八月はお母さんの命日でもある。それでもお父さんは仕事を理由に墓参りにさえ来ようとしなかった。

お母さんが病気で入院してもお父さんは、たまにしか病院に来なかった。

お父さんはお母さんよりも僕よりも仕事が大事な人だった。

僕はそんなお父さんが大嫌いだ。

お母さんはいつも一人で頑張っていた。

最後の最後まで。

電車がおばあちゃん家に近づくと山々と眩しいくらいの緑が飛び込んできた。

おばあちゃん家は昔からある旧家だった。所々壊れていたり床がギシギシいうけれど、とても重厚で、どっしりと構えていて人の温

もりがあるこの家が僕は好きだった。

その家の中庭には何かを祭ってある祠があった。

おばあちゃんは僕が行くと、とても嬉しそうな顔をして歓迎してくれた。僕にご馳走を作ってもてなしてくれた。

おばあちゃんは忙しそうに家中を動き回り働いていた。そして毎朝、中庭に有る祠の周りを掃除し拜んでいた。

太陽がぎらつく暑い日、もうすぐお盆でお客さんが来るから掃除を手伝って欲しいとおばあちゃんに頼まれ、僕は一人蔵の中の掃除をしていた。

蔵は中庭を挟んで反対側にある。

この蔵も家と同じに古く、壁の表面が落ちて繊維のような物が剥き出しになっていた。

昼間でも薄暗い蔵の中は、かび臭い匂いと蒸し蒸しと熱気がこもっており、僕はすぐに飽きてしまった。そんな時ふっと目をやると今まで全く気づかなかったが、地下に続く階段の脇の壁に扉のようなものが目に飛び込んできた。

近づいてよく見るとそれは確かに扉だった。

古い古いその扉は誇りを被りながら壁と同じ色になっていた。

僕は不思議と興味が湧きその扉に手を掛け押ししたり引いたりしてみたが固く閉ざされたままで全く動かなかった。扉には大きな鍵穴があった。そこから中を覗いて見たが真っ暗で何も見えなかった。

あの扉の向こうに何があるんだろう。すごい宝物でもしまっているかもしれない。

中学一年の僕は妄想だけが広がり、その扉を開けたくてしょうがなくなかった。

僕は急いで母屋に戻るとお昼の支度をしていたおばあちゃんに叫んだ。

「蔵の奥の階段の横に扉を見つけたんだ…。あれは何？」

僕は何気なく聞いたつもりだったが、おばあちゃんはちよっと眉間にしわを寄せ怖い顔をした。

「あの扉に触っちゃダメだ。」

「なんで？」

「あれは昔から悪霊を封印してある。祟りがあるから近づくな。」

「でも…。中には何かがあるの？見るだけでもいいから。」

僕はしつこくせがんだが、おばあちゃんは手を顔の前で振りながら一緒に首を横に振った。

「ダメなもんはダメだ。昔からそう言われておる。そんな事忘れて畑にいる爺さんにお昼だつて呼んできておくれ。」

おばあちゃんはしわくちやの顔に更にしわを寄せてなまりのある口調で言った。

仕方なく僕は畑に向かって走った。しかし、頭の中は気になって気になって仕方が無かった。

その日の夜、僕は夢を見た。あの扉を黒い大きな鍵で開け無数の光が飛び散るのを。そして、僕は何度も何度もあの扉の奥から呼ばれる声が聞いた。

朝になり僕はすぐ扉の前にいったが扉は固く閉ざされたままだった。

お盆に入るとおばあちゃんの家にはお客さんが毎日のようにやって来た。

その日は祠を開けて中に祭つてある物を外に出し、中を掃除したり皆で眺めたり手を合わせたりしていた。

今まで大人達のその光景を何度か目にはしていたが、中身を見るのは初めてだった。

それは、鈍い輝きを放す短剣だった。

小さい頃からこれはご先祖様だよと言われて来たからつきり仏像みたいな物を想像していた。

「この短剣は昔、ご先祖様が使っていたの？」

僕は隣にいた伯父さんに尋ねた。

「使っていたというより取り上げた感じかな。これは精霊の短剣と云われているんだよ。何でも精霊が人間になる時、全ての力を剣に封印し始めて人間になる事ができると云われているんだってさ。」

「そうなんだ。」

僕は目を大きく開け短剣を眺めた。

「何だ、興味あんのか？蔵の地下にたくさんその頃の事を書かれた書物がたくさんあるぞ、まあ昔の物だから難しくて読みにくいけど先祖の武勇伝が書かれているんだよ。叔父さんがまだガキの頃、曾爺ちゃんによく読んで貰ったよ。」

僕は伯父さんに蔵の中にある扉の事を聞いてみようとした。が僕はもう一つ祠から出て来た物に言葉を失った。それは鉄と木で出来た黒い鍵だった。僕は鍵に釘付けになった。信じられない。あの夢と同じだ。大きさも形も。

僕は胸の鼓動が高鳴りその場に居ても立っても居られなくなった。胸を押さえながらとにかくはやる気持ちを押さえ夜まで待つ事にした。

僕はひたすら皆が寝静まるのを待った。大人達は酒を飲み遅くまで騒いでいたが、酔いが回り始めると深い眠りに落ちていった。

僕は小さな懐中電灯を握り締め、そおつと部屋を抜け出した。そして、祠から鍵と短剣を持ち出し、真っ暗な蔵の中に掛け込んだ。

扉の前に立ち黒い鍵を鍵穴に入れる。鍵は鍵穴に吸い込まれるようにぴつたりと入っていた。ゆっくり回していくとカタンと鍵がはずれた高い音がした。

僕は分厚いその扉を押した。

永い間、開ける事を許されなかったその扉はとても重く固かった。僕は何度も扉に体当たりをした。そして、少し隙間が開くとそこに身体をねじ込むようにして扉を押した。

扉は、鈍い音を立てながらゆっくり開いた。中からは埃とカビ臭いにおいが鼻を突いた。

僕は手で鼻と口を押さえながら懐中電灯で中を照らした。小さな

部屋だった。その中央にバスケットボール位の茶色く、ぼそぼそとカスのような物が付いた石が置かれていた。石の下には文字の様な物が書かれており、周りには、しめ縄が幾重にも巻きついていた。何だこれ？僕は何かすごい物が置いてあると期待していたが、ただの汚い石にちよつと落胆した。

石に近づき触ろうとした際、鍵と一緒に持つて来てしまった短剣をうっかり落としてしまった。短剣は鈍い音を立て石にぶつかった。僕は慌てて短剣を拾おうとした。が、短剣に近づいた瞬間に僕は石から放たれた光に目をつぶった。

その強い光に瞼の上からも光が突き刺してきた。夢と同じ光だ。心臓がバクバクと鼓動した。

恐怖と好奇心が僕の中で戦っていた。数秒後、僕は恐る恐る目を開けた。

周りには石が砕け散り中央に光の球体が浮かんでいた。その現象に僕は全く体が動かなくなりその物体から目が離せなくなっていた。やがて球体は細長くなり人の形に変わっていく。

僕はいつのまにか、恐怖が吹っ飛び目の前に広がる不思議な現象を茫然と見つめていた。

光が弱まりだんだんと姿が現れた。

銀色の髪に緑色のギョロとした瞳。

僕は爬虫類を連想した。しかしなぜだか、その姿が美しく見えた。緑色の瞳だけが動き、辺りを見渡し始めた。そして僕と目は会うと少し目を細め、また光に覆われ再び姿を現した時は人間の女性の姿をしていた。

薄い茶色の髪に同じ色の瞳。

こんなに美しい人を僕は見た事が無かった。彼女はその薄茶の瞳で僕をじつと見つめて来た。

僕はその瞳にすい込まれそうになりながら何とか言葉を発した。

「君は誰？何者？」

僕の声は裏返っていた。

「私は…。ギーン。」

彼女はゆつくりと答えた。

「ギーン？変わった名前だね。僕は南条 光。」

「ヒカル…。」

ギーンは小さく呟いた。

「あの、どうして石に入っていたの？」

「…。」

「おばあちゃんは悪霊とか言っていたけど。僕にはどうしても君が悪霊には見えないんだけど、最初はちょっと驚いたけど…。今はちつとも怖くないし…。」

「私は、悪霊と同じ。たくさん人に危害を加えてきた。もうこの世に出てくることは無いと思っていた。」

ギーンは静かに答えた

「お前はこここの者か？」

「僕のお母さんの実家なんだ。」

「…。」

「僕のご先祖様と関係があるの？」

僕は伯父さんから聞いたご先祖の武勇伝の話が頭をよぎった。そして精霊から取り上げたという短剣の事も。急に気になり、僕は短剣を探して辺りを見渡した。

するとギーンは足元に落ちていた短剣を拾い上げた。

ギーンの手の中で短剣が溶け出すように小さくなり自分の首に付けていた銀の鎖に通し首に下げた。そして、短剣の柄の部分には赤い石のような物をはめ込んだ。

「これは私のだ。」

ギーンは僕を見ると小さくなった短剣に手をあてながら言った。僕は黙って頷いた。

次の日、僕は朝から蔵の中に眠っていた古い書物を持ち出し古文と格闘していた。

ギーンは黙って僕の隣に座っていた。

あの後、散らばった石を拾い集め台の上の置き何事も無かったように扉を閉め鍵を掛けた。鍵を元の祠に戻したが短剣はギーンに返してしまった為、形のよく似た木工用小刀を包んであった布に巻き一緒に戻しておいた。

おばあちゃん達には内緒で僕は三日間、ギーンを自分の部屋に置いて過ごした。

第二章 過去

ギイーンは森の奥深く、小川のせせらぎが聞こえる静かな岩に住む苔の精霊だった。小川に住む魚や蛙、虫たちが友達だった。

ある日、ギイーンは道に迷った青年と出会った。青年の名は竜樹と言った。二人はあつという間に恋に落ちた。

しかし人間と精霊では結ばれる事は出来ない。ギイーンはある決心をした。それは自分が精霊を捨て人間になる事。愛する人と一緒に居られるのならギイーンは精霊で無くなることなど何とも思わなかった。

ギイーンの周りの仲間達は反対したがギイーンの気持ちは変わらなかった。

ギイーンは人間に成る為、銀の短剣に自分の精霊の力を全て注ぎ込んだ。

青々した若葉の色をした瞳も髪も精霊としての永遠の命も。

そして、森も捨てギイーンは竜樹の元に向かった。

しかしギイーンを待ち受けていたものは愛する人の裏切りだった。竜樹の家では精霊を嫁に貰うなどとんでもない事だった。

竜樹は家を出、ギイーンと共に二人で暮す事にした。

二人はとても幸せな時間を過ごしていた。

しかし怒った父親は二人を引き離し竜樹を遠くの地へ監禁した。

人間は人間と一緒にいるほうが良い。精霊なんかと一緒に居たら息子が不幸になる。

ギイーンは何度も父親の元を尋ねるが取り合ってもらえなかった。

人間になったギイーンは森にも戻れずただ竜樹の帰りを一人待っていた。

竜樹とギイーンの噂は小さな村にはすぐに広まった。

父親はギーンが疎ましかった。

そこである占い師にこの事を相談したのだった。

占い師は父親にこう伝えた。

「早く息子さんに嫁を貰ってあげなさい。そうすれば精霊も諦めるでしょう。」

父親はすぐ息子に嫁を貰ってやった。

その話を聞いたギーンは悲しみに打ちひしがれた。それでもギーンは竜樹を信じ待つ事を決めた。

一年後やつと竜樹に再会した時、彼は既に子供がいた。

ギーンは悲しみと信じて待つていた自分を裏切られた気持ちがいっぱいで胸が破裂しそうだった。ギーンの心はズタズタに切り裂かれていった。

そんなギーンの元へ竜樹の父親がかつて相談した占い師がやって来た。

「森の精霊ギーン、お前がここに居るべきではない。是非、我が師の元へ。ご案内しましょう。」

ギーンは何も考えることが出来なかった。ただ悲しみとそして時間が経つに連れ現れた憎悪の気持ちで支配されていた。

善悪の判断さえすることが出来なくなっていた。

ギーンが占い師に連れて来られた場所は魔民が住む洞窟だった。

「よく来られたな。苔の精霊ギーン。」

ギーンの3倍はある大きな男が現れた。名は九苦魔と言った。

魔の世界に住む魔民は精霊のギーンにとっては正反対の存在。

人の弱いところに着け込む卑怯な奴等だった。

しかし今のギーンにとってそんな事はどうでも良かった。

ギーンの心は精霊の心でもなく人間の心でもなかった。

裏切られた心は復讐に支配されていた。

九苦魔は精霊の力が欲しかった。たまたま、村の噂で精霊が人間の元に嫁いだと聞きつけた。こんなうまい話はそうそうない。それで占い師が九苦魔と組んでギーンを嵌める事にしたのだ。

九苦魔はギーンと竜樹のささやかな幸せを奪い去ったのだ。人間に惚れた精霊ほど騙すのは簡単だった。竜樹の父親操り、二人を別れさせ、裏切る。占い師のシナリオ通りに事は運んでいった。そして何も知らないギーンはそのまま正気を失い彼等の思い通りに操られた。

その日からギーンは九苦魔の力で魔民になり精霊の力を甦らせた。そして大暴れをした。

精霊の力を使えるギーンにとって人間達が使う悪魔封じや呪文などは全く通用しなかった。

魔民達はそんなギーンの後につき、物を盗んだり、娘をさらったりとやりたい放題に暴れた。その悪行に困り果てた村人達は竜樹の家に相談にやって来た。

竜樹は分かっていた。自分以外ギーンを止めることなど出来ないことを。

数日後には村人が呼んだお寺の高僧がやって来た。精霊でもない人間でもないギーンを封印することは不可能に近かった。

しかし、ギーンが愛する竜樹の心臓ならギーンを封印する事が出来るかもしれない。竜樹は自分の命と引き換えることを高僧たちに話した。

そして竜樹の心臓と高僧たちによってギーンは封印された。

竜樹の姿を見たギーンはまるでこの時を待っていたように自ら彼等の結界の罫に嵌った。

かつて自分が住んでいた懐かしい苔の生えた岩の中に。

第三章 緑の山

夏休みが終わり僕は家に戻った。もちろんギーンを連れて。僕の部屋でギーンはおとなしくしていた。

封印されていた期間が永かったせいだろうか。一日の大半のギーンは眠っていた。

お父さんにはギーンは見えなかった。

ギーンはこの時代、この世の何者でもなかった。ギーン自身も自分が何なのかわからないでいた。

たまに近くの川に行って水面を眺めていた。

「森に帰りたい…。」

ギーンが小さな声で言った。

僕は何とかギーンを励まそうと思った。

「ギーンの住んでいた所に今度の週末行ってみようよ。」
ギーンは精霊に戻りたがっていた。一度捨てた昔の自分に。

僕は少しでもギーンの役に立ちたかった。絶望の悲しみから救ってあげたかった。悪事を働いたギーンは森には戻してもらえないのか。罪は消えないのか。僕はしきりに考えたが答えは出てこなかった。ずっと一人でいたギーン。その姿は、僕のお母さんの姿に重なった。いつも一人だったお母さん。いつの日か心の病気にかかっていた。

僕は持っていたおこずかいをたいて新幹線に乗りギーンの故郷に向かった。電車を乗り継ぎおばあちゃんの家から更に三十分行った山に向かった。

駅前には想像よりはるかに観光地化が進み賑わっていた。

僕達はモノレールで頂上まで登った。そこも観光地化され道はある程度整備され山登りコースになっていた。更に進むと、子供達が水辺で遊ぶ声が聞こえてきた。

小川の周りに木で作られた椅子とテーブルが置かれていた。そこ

でたくさんの方がお弁当を食べたりしていた。

ギーンが話していた静かな森ではなくなっていた。

僕は言葉も出さずにそこに立ち尽くしていた。ギーンは僕の横をすうつと通り小川の水に手を入れた。僕もギーンの後の続き小川に手を入れた。

冷たい水の感触は無表情で、ギーンの住んでいた森の小川にある生命の音は何も聞こえなかった。魚も虫達も姿を消していた

ギーンの大好きな苔の生えた石は消えていた。

小川の流れの音も人の声でかき消されていた。

「ギーン、ごめん。こんなつもりじゃなかった。」

「ヒカルのせいでは無い。私がここに住んでいてもいつかはこうなっていたんだから。」

心なしかギーンの瞳が潤んでいた。

白いギーンの手が水の中にある小石をどかした。すると小さなカニが出てきて慌てて違う小石の影に隠れた。ギーンは小さく微笑んだ。

僕はそんなギーンの横顔を見つめた。精霊だったギーンはどんな姿だったんだろう。きっと綺麗だったんだろうな。

哀しげなギーンを見ながら僕はそんな事を考えていた。こんな時になんて事考えているんだろうと僕は自分の頭を叩いた。

僕は何とかギーンが精霊に戻れないものか必死に図書館に通って調べた。しかし、そんな方法はどんな本にも書かれていなかった。

僕はお小遣いが貯まると決まってギーンを連れ色々な山に登った。探してあげたかった。ギーンの住んでいた場所と似ている所を。

第四章 自由

ギーンと出会ってから四ヶ月過ぎた十二月、おばあちゃんが亡くなった。

僕は新幹線に飛び乗った。お父さんは相変わらず仕事だった。働き者でいつも元気に歩き回っていたあのおばあちゃんが亡くなるなんて信じられなかった。

また、ぼくを大切にしてくれる人を失った。

僕はまるで眠っているかのようなおばあちゃんの顔を見た途端、押さえ切れなくなり声を上げて泣いた。ギーンもいつのまにか僕の隣に座っていた。

お葬式に参列しているとたくさんのおい出が浮かび上がり僕はまた泣き出してしまった。

皆と離れて蔵の方に向かった。

ギーンは蔵の前に立っていた。

「ヒカル、大丈夫？」

「ああ平気、男なのに泣くなんて。」

そう言っ僕は袖口で目を何度も擦った。

それから僕とギーンはしばらく蔵の前にたたずんでいた。

冬の真つ青な青空を僕は見上げていた。

お葬式が終わった次の日、僕は伯父さんと叔母さんと一緒におばあちゃんの部屋の片付けを手伝っていた。といてもおばあちゃんの部屋は綺麗に片付いていた。そこへ伯父さんが、茶色く色が変色した巻物みたいなものを僕に渡した。

「これは？」

「ばあさんからだ。」

見ると巻物の端に紙切れが挟んでありおばあちゃんの字で「光へ」と書かれていた。

「これ僕が貰っていいの？」

僕は伯父さんに尋ねると

「もちろん、お前宛てになっっているからお前のもんだ。」

僕は部屋に戻り巻物を開いたそこには絵と字が書かれていた。

もちろん昔の字など僕には読めないけどその絵で何が書かれているのか想像が出来た。

僕は胸を捕まれた気持ちになった。おばあちゃんは知っていたんだ。僕とギイーンの事を。気が付くとギイーンが隣に来ていた。

僕から巻物を受け取るとじいっと目を通し始めた。

「これは」

ギイーンが小さく呟いた。

僕は驚いて巻物を覗いた。

ギイーンは胸の短剣に手を当てた

「この短剣に封印されている。」

「えっ何が？」

「封印を解けば……。」

「どう言うこと？」

はやる僕の気持ちとは裏腹にギイーンは静かに答える

「水の神、所へ行く。」

「行くつて？僕も行くよ。」

ギイーンは首を振った。

「ヒカルは連れていけない。そこへ行くには危険な事が多すぎる。」

「大丈夫だよ。僕も一緒に行く。」

「ダメ、人間は連れていけない。」

「ギイーンだって危険だろ。精霊の力使えないでしょ。」

ギイーンは何も言わずに黙り込んだ。

僕は言いすぎてしまったと後悔したが、ギイーンに謝る事が出来なかった。

次の日朝、ギイーンの姿が無い事に気づき僕は血が逆流した。

まさか、もう行ってしまったのか。

僕はもうギイーンに会えなくなる事に怯えた。ギイーンを失いた

くなかった。

僕は飛び起きると家中を探し始めた。

しかしギイーンの姿は何処にも無かった。僕は力無く部屋に戻るしかなかった。

昨日貰った巻物をもう一度目に通して見た。よく見ても何て書いてあるか分からなかったが、一つの絵に僕は目が止まった。

それはある場所を示すしるし。それはこの近くにある神社のしるしだった。

僕は急いで着替えるとその神社に向かった。

樹齢何百年も超える木々に囲まれた社の中を僕は走り回った。

息が切れ立ち止まって辺りを見渡すと静かに朝の光が指し込んで来た。

そしてその光の筋の先に地図に描かれていたしるしが刻まれた石碑が立っていた。

石碑に近づくと石が陽炎のようにゆらゆら動き始めた。僕は手を伸ばして石に触ろうとすると石の中に手が吸い込まれていく。

「もしかして？」

僕は両手で石の中に手を入れたそしてゆっくりと石の中に僕は身を沈めていった。

石の中は真っ暗な闇だった。ギイーンはこの中を通って行ったのだろうか。

僕はどの方向に進んでいるかも分からない闇の中をただ足だけを動かしていた。すると足が地面に着く感触があり右側に石の壁らしき感触があった。

僕は石の壁に手を当て確認しながら進んでいった。

どのくらい歩いたのだろう。時間と距離感覚が全く麻痺していた。目が慣れて来て暗闇の中がうつすらと見えるようになって来た。

僕はギイーンを見つけたくて早く歩き出そうとした。

するとサッと僕の前に影が横切った。

何？僕は目を凝らし、辺りに気を集中させた。

何かいる。僕の身体は見えないものの恐怖で硬直し出した。ぼつんと僕の襟首に水が落ちてきた。

「うああ…。」

僕が声を上げ振りかえると暗闇に光る二つの目が浮かび上がっていた。

僕の体は凍りついた。荒い息遣いも聞こえてきた。身体は恐怖でガタガタ震え出した。一歩ずつ僕に近づいてくる。

そしてその鋭い爪が僕に向かってきた。もうだめだ。僕はとっさに身を屈め地面に頭を着けた。

ドサツと何かが倒れる音がした。僕がそおつと頭を持ち上げると僕の前にもう一つの影が立ちはだかっていた。それはすぐにわかった。

「ギーン…。」

緑色の瞳をしたギーンは銀の短剣を持ち僕に襲いかかるうとした奴を切り付けた後だった。

「どうしてここに。」

「ギーンの事が心配で…。でもこんなザマじゃカツコ悪いね。」

僕は手に付いた小石を払いながら立ち上がった。

「本当にヒカルは無茶な事ばかりする。」

ギーンはちよつと飽きた顔で僕を見て、ため息混じりに言った。

「ここまで来てギーンもさすがに帰れとは言わなかった。」

僕はギーンの後が続いて歩き出した。二人で黙々と静寂の暗闇を歩き続けた。

次第に道が明るくなってきた。

「出口だ。」

僕は喜んで走り出したが、目の前の光景は僕の想像とは全く違うものだった。

出口かと思つたその場所は、僕達の道を遮るように真っ赤なマグマが激しく流れる谷だった。

対岸には先に続く洞窟が続いていた。

「ここを渡らないと先に進めない。」

「でも、橋が無いよ。どうやって渡るの？」

僕は辺りをキョロキョロ見渡した。

ギーンはマグマに近づき少し覗き込んだが激しい流れと熱さに首を振った。

「渡れそうなどころも無いし先を進むのは難しいかもしれない」

「えっそんな。ここまで来たのに。」

僕はマグマの近くまで行ってどうにかして向こうに渡る方法は無いかと端から端まで走り回った。

何か方法があるはずだ。

僕はギリギリまで身を乗り出し真っ赤なマグマを見つめた。

しかしその強烈な熱さに目の水分が全てなくなりそうになった。

それでもぼくは何度も何度も身を乗り出しながらマグマを見つめた。

ギーンも何か考えているようだった。そして近くに落ちていた小石を拾うと向こう岸に向かって投げた。小石は放物線を描くように飛んでいったが、途中で溶けるように火を吹き散ってしまった。

「マグマの上は高温過ぎて通過することは難しい。」

「他に道は無いの？」

ギーンは黙って首を横に振った

「このマグマの川はおそらく暗炎界に繋がっているの。ここが暗炎界の領域なら女王の許可が無いと通れないかもしれない。」

「どうすれば？」

僕とギーンはただその場に立ちすくむしかなかった。

僕は向こう岸を見つめた。あそこに洞窟の続きがあるのならきっと方法があるはずだ。

「お願いするよ。」

僕は叫ぶとマグマにギリギリまで近づき目を閉じた。そして心の中で叫んだ

「女王、暗炎界の女王、どうかこのマグマの川を通過させてください」

い。僕達はあなたの領域を侵しに来たものではありません。ただこの先にある水の神にどうしても会いたいただけなのです。お願いします。ここを通して。」

そんな僕の横にギイーンも立っていた。僕がギイーンを見るとギイーンもこつちをむいた。

すると微かに涼しい風が何処からか吹いてきた。今まで全く吹いてなかったはずなのに。

僕は風の吹いてくる方向に目をやるとすうつと薄い影のような物が見えた。やがてそれが近づいて来た。

そして僕はその姿をはつきり見たのだ。

言葉では表現できない妖しいほど美しい姿を。女王だ。ギイーンの美しさとは違う別格のものだ。女王は僕と目が遭うと微笑んだかのように見えた。そして通りすぎると消えていった。

「今の見た？」

僕は目を見開いたまま言った。

「ギイーンもまた茫然としていた。」

僕はゆっくり視線を動かすと今まで無かった橋がマグマの川に架かっていた

「橋だ、ギイーン橋だよ」

僕は興奮して橋を指差した

「本当だ。」

ギイーンも橋を信じられないように見つめた。

「さあ、行こうギイーン！」

僕はギイーンの手を取るとその橋を渡った。橋の上はマグマの熱さは全く感じなかった。

「ここを渡れたのはヒカルのお陰だ。」

「？」

「私一人なら永遠に渡れなかった。女王にお願いするなど考えもつかなかった。」

「ギイーンだって一生懸命だったから渡れたんだよ。」

そう言って僕は繋いでいたギーンの手を強く握り締めた。洞窟を抜けると森に出た。僕とギーンは森の中をどんどん進んでいった。そしてついに水の神、碧晶の住む大きな泉に出た。水は静まりかえっていた。鳥達の声も風の音も聞こえなかった。

「静かすぎる。」

ギーンが呟くと森の中からガサガサと音が聞こえてきた。

「誰？」

ギーンが振りかえるとそこには大きな姿をした怪物が現れた。僕はその恐ろしい姿に腰を抜かしその場にしゃがみ込んでしまった。

「九苦魔！」

ギーンが鋭い目で睨んだ。

「ひさしぶりだな、ギーン。情けない姿しておって。」

九苦魔は鋭い牙を剥き出しにして笑い出した。

「人間に封印されるなんてお前も愚かな。」

「お前、なぜここにいる？」

「そろそろお前が来ると思って迎えに来てやったんだよ。」

「……」

「精霊でも人間でもないお前の存在を誰が認めると思ってんだ。お前も自由になりたいんじゃないのか。」

九苦魔はチラツと僕を見た

「ちんけなガキだな。つまみにもならねえな。」

「九苦魔、私はもうお前等とは一緒になる気は無い、私は元に戻るためにここに来た。」

「何、馬鹿なこと抜かしてんだ。お前は二度と精霊には戻れないんだよ。お前自分が何をして来たか忘れた訳じゃないだろうな。」

「わかっている、私は森に住むことだけでも許してもらおうと来た。」

「森に住むだと？永いこと封印されて頭がイカレたんじゃねえか。」

お前は本当に馬鹿だな。」

「私が怒らないうちにさつさと引き上げてくれないか。」

「何だと、貴様。何も知らないくせに。お前の愛した人間もお前と関わったばかりに可愛いそうだったな。」

「？」

「お前の為に命を落としてまで封印して、面倒な事をしたもんだ。俺たちが仕組んだとも知らずに。」

九苦魔は牙を剥き出し醜い大きな声で笑い出した。

「仕組んだ？」

「無駄死にまでして。始めからお前等がうまく行かないようにしてたのさ。」

「何だと？」

「人間達は本当に頭が悪いよな。」

「私を嵌めたのか？」

九苦魔は笑い続けた。

「竜樹を嵌めたのか？」

九苦魔はギイーンの声が聞こえんばかりに笑い続ける。

「お前だけは許せん。」

ギイーンの瞳が緑色に変わった。

「何を生意気に。精霊の力が無いお前が勝てると思っているのか？」

九苦魔はそう言うのと拳を地面に叩きつけた。

辺りが揺れ大きな地響きとクレーターのような穴が出来ていた。

「俺と組めば命だけは助けてやってるぜ。」

ギイーンは自分の胸に手を当てるとそこから鈍い光がこぼれ右手に銀色の短剣を握り締めた。

九苦魔の鋭い爪がギイーン目掛けて振りかざされるとギイーンは身軽にひょいと避けると九苦魔の右目を差した。

耳が割れそうな叫び声と共に九苦魔の目から青い液体が噴出した。

すごいギイーン。僕はギイーンの所に駆け寄ろうとした際、九苦魔の太い腕が伸び身体を掴まれ締め付けられた。僕は苦しさにもがいたがその手は緩まなかった。

「ヒカルを放せ！」

ギーンの声に九苦魔は、にやっと笑うと僕をギーンの目の前に降ろした。

「ヒカル、」

そう言つてギーンが僕の所に近づこうとした瞬間、僕は目の前が真っ白になった。

僕の体から熱い何かか吹き上がった。物凄く身体が熱い。僕はどうなったの？ギーンが泣き出しそうな顔をして何か言っている。何も聞こえないよ。ねえギーンなんて言っているの？

九苦魔の鋭い爪が僕の心臓を貫いたのだった。

僕は真っ白い世界に浮いていた。

ここは何処？ギーンは何処にいるの？僕は死んじゃったのかな。白い白い光景が広がっていた。僕はフワフワ浮いていてとても心地良かった。なんだか眠くなってきた。

僕がウトウト始めると懐かしい声が響いた。

「光、光！」

僕は聞こえた方に振り向くと一人の女性が立っていた。

「お母さん？」

「光、ここにいてはいけません。早く戻りなさい。」

「戻るってどうやって？」

僕はこの真っ白い世界でどうやってたら戻れるか見当がつかなかった。僕はお母さんを見つめた。

そしてずっとお母さんに聞きたかった事があるのを思い出した。

「お母さんは、幸せだった？」

お母さんはにっこり微笑んで答えた。そして僕を愛しいそうに見つめると

「そばに居てあげられなくてごめんね。」

お母さんは僕の頭をやさしく撫でた。

僕はもつとたくさんお母さんと話したかった。でも言葉が見つからない。たくさん有りすぎて。お母さんはそんな僕にお願いする様

に言った。

「光、お父さんと仲良くしてあげてね。」

僕はお母さんを見つめた後うつむいた。

どうしてあんなに冷たいお父さんの事を言うのか僕には理解出来なかった。

「僕は、お母さんを苦しめたお父さんが嫌いだ。」

いつも仕事で僕と遊んでくれた事もない。お母さんの時より見せる切ない表情が辛かった。お母さんの病気だつて、お父さんさえ振り向いてくれれば僕はお母さんと別れなくても良かったんだ。ずっとお母さんと暮せたんだ。

「お母さんが、弱すぎたの。一番、光に辛い思いをさせてしまったわ。お父さんにも悪い事をした。でもお母さんは、お父さんと光に出会えて幸せだった。」

お母さんの目には涙がたくさん溜まっていた。そして、僕に手を振った。僕もお母さんの姿が滲んで見えた。

僕はお母さんに背を向けると目を閉じた。

そして強く思った。あの世界に帰る。

僕の目の前に森の景色が広がった。そして僕の目の前に一人の青年が現れた。青年は山道を登っていく。僕は後を追いかけた。呼びかけても僕の声も姿も見えてないようだった。

やがて小川のせせらぎの音が聞こえてきた。

そして僕の前に現れたのはギイーンだった。新緑と同じ緑の髪と瞳。綺麗だ。とつても綺麗だねギイーン。本当は君をこの姿に戻してあげたかったんだ。

するとギイーンは青年を見るととびつきりの笑顔を向けた。きっとその青年が竜樹だね。君が愛した竜樹。裏切られて憎んでも君は竜樹が好きなんだね。僕のお母さんも同じだ。女の人の心は僕にはまだ分らないよ。

僕は結局、何の役にも立てなかった。

ギイーンごめんね。

僕は意識が遠くなる感じがした森の景色が消え暗闇になった。
最後にギーンの精霊の姿が見られて良かった。
僕はそのまま意識の奥へ奥へと入ろうとしていた。

「ヒカル、ヒカル。」

誰かが僕を呼んでいた、聞き覚えの有る澄んだ綺麗な声。

「ヒカル、お願いだから目を開けて。」

ギーンの声が聞こえる。ギーン。

僕はカッと目を開いた。そこには顔中血だらけで泣いているギーンがいた。

僕はそおつと手で触れようとする。ギーンの手が僕の手を握り返してきた。

「ヒカル、大丈夫？」

「九苦魔は？」

「もういないわ。」

僕はもう片方の手で自分の心臓の所に手を当てた。そこには心臓の鼓動がしていた。

九苦魔に刺されたはずなのに。

ギーンは僕の心臓の上にそつと手を乗せると

「ヒカル、私のせいでごめんなさい。痛かったでしょう。もう少しであなを失う所だった。でも碧晶様に助けてもらったの。」

そう言うとギーンの隣に白髪の老人が現れた。

「ヒカルに新しい心臓を入れたから。」

「新しい心臓？」

僕は聞き返した。

「ギーンの短剣に封印してあった竜樹の心臓じゃよ。」

碧晶は静かに告げた。

「竜樹の？でもギーンはどうなるの？竜樹の心臓が無いと精霊に戻れないんですよ。」

「私はいいの。ヒカルの命が助かれば。」

「でも…。」

「ヒカル、私は元に戻ることもよりもあなたを失うほうがつらいの。大切な人をもう誰も失いたくないの。」

「ギーン…。」

僕は涙がぼろぼろ溢れ出て来た。

「ありがとう。」

ギーンのやさしさ、強さ、そして切なさが心臓を通して伝わってきた。

そして僕の意志でなく勝手に身体が動きギーンを抱きしめた。竜樹の思いが心臓から伝わってくる。

僕の中で命を吹き返した竜樹の意識が僕を通してギーンに伝えていたのだ。僕は心臓の鼓動から竜樹を感じた。竜樹もまたギーンと同じように苦しんでいた。自分の心臓を使う事によりまたギーンが元に戻るように。命を掛けてギーンを愛していた。二人には僕の想像をはるかに超える強い絆があったんだね。

「竜樹…。」

ギーンも大粒の涙を流し泣き始めた。

涙がこぼれればこぼれる程、ギーンの薄茶の髪は緑色に変わり始めた。涙と一緒に今までの過去がを洗い流されていくかのように。ギーンは精霊の姿に戻っていく。

「ギーンの心が森に認めてもらえたんじゃ。」

碧晶はギーンにやさしく言うと言姿を消した。

竜樹の願いが届いた。ギーンは精霊に戻り森に帰れる。

僕とギーンは、しばらくお互いを見つめ合っていた。

「ギーンはこの森に残れるの？」

僕がそう聞くとギーンは黙って頷いた。

「そうだよな。」

僕は自分の気持ちを押さえた。離れるのはつらかった。でもギーンの為を思えばここに居たほうが良いに決まっている。

「また遭えるよね。森に入ればギーンにまた遭えるよね。」

「ええ、きつと。」

ギーンがやさしく微笑んだ。
「ヒカル、ありがとう。」

第5章 思い

僕はギーンの笑顔を最後にまた意識が遠くなるのを感じた。目を覚ますとギーンを追って入って行った神社の石碑の前だった。

夕日がオレンジ色に石碑を染め葉の揺れる風のやさしい音色が聞こえていた。

僕は石碑に手を当ててみた。石碑はひんやりとしていた。今までの出来事は夢だったのか。

僕は現実の世界で夕日に染まっていく木々を見つめていた。しばらくすると、砂利の上を歩く足音が聞こえてきた。

僕が目をやると向こうのほうから一人の男の人が近づいて来た。

「お父さん？」

僕は驚いた。まだ夢でも見ているかと思った。

「光、こんな所にいたのか。朝からいないって聞いて心配してたんだぞ。」

そう言つて上から僕を見下ろした。

「ごめんなさい。」

僕はうつむく事しか出来なかった。久しぶりにお父さんの声を聞いた。

いつもすれ違いの生活をしていたせいかここに居るのが不思議な気分だった。

「どうしてここにいてわかったの？」

「伯父さんがお前がこっちの方に走って行くのを見たって言うから探しに来たんだ。朝から何してたんだ。」

「…。」

「帰るぞ。」

そう言つて後ろを向いたお父さんは、何かに気を取られるように動きを止めた。

お父さんの目線の先には今にも朽ちそうな木で出来たベンチが置いてあった。

「どうしたの？」

「まだ、あったのか。」

お父さんは独り言のように呟くと、懐かしそうにその木のベンチを触りながらゆっくり腰を下ろした。

「？」

僕が黙って見ているとお父さんは何かを思い出している様に宙を仰いだ。お父さんはゆっくり口を開いた。

「ここで、お母さんに初めて会ったんだ。」

「えっ？」

僕はお父さんの言葉にびっくりした。お母さんが亡くなってから一度もお母さんの事を口にした事がなかったからだ。

「まだ、大学生の頃、合宿でこの近くに來ていて、練習がきつくてよくサボってここで涼んでいたら、お母さんがこの先の図書館に通っていて、いつも目が合ってたね。そのうち話すようになったんだ。」

お父さんは照れ笑いをした。お父さんの笑った顔を見たのは久しぶりだった。

「それで、お母さんの事好きになったの？」

「ああ、そうだな。」

「じゃあどうしてもっと大切にしてあげなかったの？」

お父さんは目を細くして遠くを見つめた。

「仕事が忙しくて、いつのまにかお母さんを放っておいてしまった。病気になっても見舞いにもたいして行ってやれなかった。悪い事をしたと思っている。」

「お母さんはいつも一人で病氣と戦っていたんだよ。」

「父さんが殺したようなもんだな。光も俺のこと憎んでいるだろう？」

「……。」

僕は下を向いた。返事が出来なかった。

「父さんがもつと母さんの病気に早く気づいてあげれば、死なずに済んだかもしれないな。光にも寂しい思いさせてしまった。あの時の気持ちのままいらねえればよかったのに。」

お父さんはお母さんの最後まで仕事で看取ってやれなかった。

「お母さんも恨んでいるだろうな。何もしてやれなかった。家族の為と思つてきた仕事がお母さんを失わせる事になつてしまった。」

お父さんはそのまま黙つてしまった。お父さんはお父さんなりにお母さんの事を思つていたのかもしれない。

お母さんと出会つたこの場所がお父さんのカラカラの心を甦らせたのか。

今まで僕が知らないお父さんがここにいた。

こんなにも自分の気持ちを話してくれた事は一度もなかった。僕の中で存在しなかつたお父さんが初めて見えた気がした。

お母さんが好きになつたお父さんだ。

僕はずつと許せなかつたけど、今なら少しお父さんの事情も理解してあげられるかもしれない。

きつとお父さんとお母さんの間には僕には分からない絆があるんだね。だって僕の知つているお母さんはいつも笑つていた。それは幸せだからお父さんに向けているからだよね。ギーンも竜樹の前で最高の笑顔をしていた。幸せでなければそんな笑顔しないよね。僕の意識の中に出て来たお母さんも笑つていた。

「お母さんは、お父さんといれて幸せだって、それに僕はお父さんと仲良くするように。」

僕はにっこり笑つた。

僕の言葉にお父さんは戸惑つた表情をした。

それがお母さんの願いだから。僕はお父さんを嫌うだけでお父さんと向き合おうとしなかつた。

「光？」

「帰ろうよ、お父さん。」

僕とお父さんは並んでゆつくりとその神社を後にした。

オレンジ色の夕日がいつまでも僕達の背中をやさしく押してくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1099a/>

緑の精霊

2010年10月8日11時26分発行